

駒場友の会

会報 第一号



会長挨拶

会長 本間 長世

本年三月二十日に設立総会が開催され、駒場友の会が発足してから半年が過ぎました。総会では規約、初年度の予算ならびに事業計画も承認され、懇親会では蓮實重彦・前東大総長、三重野康・一高同窓会理事長(当時)をはじめ、多くの方々の祝福と励ましを頂いてめでたく出発し、一日も早く活動を軌道にのせるため、事務局を中心に努力が積み重ねられているところであります。

会員を増やし、会費を確保することが最優先の課題であることは申すまでもありません。一高精神の良き伝統を継承し、二十一世紀に求められるリベラル・アーツの教育を駒場において発展させるためのサポーターとして、駒場友の会がゆるぎない存在感を備えるようになれば、もろもろの同窓会も包み込ん

だ新しい発想の組織が機能することになります。第一年目は率直に申して手探りの状態でありますが、会員の皆様のあたたかいご支援とご鞭撻をお願いいたします。

駒場友の会発足に寄せて

前一高同窓会理事長 三重野 康

東大駒場のキャンパスは、私共旧制第一高等学校の卒業生にとつて最高の思い出と懐かしさに満ちた場所である。私共は若き日の三年間をこの地に学び、リベラル・アーツを中心とした教育を受け、高い志を養った。また、完全自治の皆寄宿寮制の下で、友らと自由に本を読み、教養を深め、切磋琢磨、さらに人は如何に生きるべきかを真摯に探った。自分の生涯においてこのような時期を持ったことを、卒業生はいずれも心ひそかに誇りとしている。

ところが昭和二十五年、学制改革により旧制一高は廃止され、東大教養学部を引き継がれた。その結果一高同窓会はそれ以後新入会員はなく、会員は減少を続け、現在会員数は約三千名、最も若い会員もすでに古希をこえている。そこで元気な会員がいる間に、一高

の良き伝統をいろいろな形で後世に遺し、後世の人々がそれを探ろうとした時に、その手がかりとなるようにしておきたいと考え、一連の事業を推進中である。

たとえば、一高関係の膨大な図書、資料、記念品等を整理し、東大に寄託する。寮歌の解説書、同窓会史を作成する。一高記念奨学基金を東大に寄付、駒場における学生の研究、学術研究会活動に資する。一高がかつてここにあつたという記念碑等を建立させて頂く、等である。

これらの大部分は、東大のご協力がなければ実現しない。ところが、東大には私共一高同窓会の提案に対し、好意溢れる対応をして頂き、私共としては大変感謝している。

その際、私共が感じ入ったことがある。一高の良き伝統を一言でいえば、リベラル・アーツの精神である。大学側のお話によれば、全国の大学の中で、それが残っているのは、東大駒場だけの由。東大はそのことを誇りとされている。一高の伝統が今なお駒場に健在であることを知り、私共は大変嬉しく思った。

そこで今般「駒場友の会」発足の話を持ち、一高同窓会としても団体として入会を申し出、受け入れて頂いた。一高同窓会は各会員が鬼籍に入るに伴い少しずつ消滅するが、その精神は、東大教養学部、駒場友の会によって承継されると確信し、意を強くしている。

駒場友の会の発足にあたって

友の会理事 遠山敦子

駒場キャンパスの正門を入って左手奥に新装なったファカルティハウスがある。そのロビーにいたとき、年輩のOBらしい方が、「最近、駒場はよくなつたね。我々の頃はこの辺も古色蒼然とした同窓会館しかなかったのだが」と感慨深く語っておられた。

実際、このところ駒場もやつとキャンパスらしい雰囲気になってきている。旧図書館が美術や科学の博物館になり、折々に凝った展示がなされる。旧駒場寮の跡地には新しいデザインの本館が活動をはじめているし、矢内原公園も明るく整備された。正門近くには情報教育棟も建ち学生達のIT技術の習得に効果をあげているのだろう。学生に対応する窓口や事務局も整ったし、キャンパスの北東側にはなんと保育所が「男女共同参画支援施設」として暖かみのある木造の建物に生まれ変わり、子供たちの明るい声がする。

まだまだ整備途上ではあるが、伝統の豊かな緑を残しながら、学生や教職員の皆さんの活動環境は格段に改善されてきているようだ。駒場を離れてから四十五年になる私にとってこの変化は実に感無量である。近年の

歴代学部長を始め関係者の継続的な努力がこのように実りつつあることに對し、敬意を表したい。

しかし、最近の駒場の変容は単に外的な施設だけではない。その内実の変容も目覚ましいものがある。振り返ると一九九十年代から駒場では高い理想の下、熱心に教育改革が積み重ねられてきたように思う。カリキュラムの見直しや教育指導方法の改革などにより、その成果は次第に上がっているようである。そうした努力が全国レベルでも評価され、複数の「二十一世紀COEプログラム」や「特色ある大学教育支援プログラム」への採択が認められたのではないか。加えて今年四月からの国立大学法人への移行を契機に、大学としての教育・研究の質の更なる向上にむけて取り組みが始まっているものと推察する。

そもそも大学が法人格をもち、同時に国立大学として国家(連邦制では州)が必要経費を負担するという設置形態は、英、仏、独、米国など諸先進国では普遍的なものである。唯一例外であった日本の国立大学も、これedyつと先進国なみになり、それぞれが魅力と個性を備えた大学として、いよいよ国際的な競争力を発揮しうるスタートラインになったといえる。いかえれば、国立大学の法人化は歴史的な必然であり、国立大学がこれまでの行政組織の付属機関という形態から脱し、様々な規制緩和を活用してまさに自主性と自

立性をもった知の拠点として大いに活躍できる条件が整ったといえる。

もちろん世紀の大改革である以上、ことに移行期の何年かは新しい方式への適合など様々な苦勞をおかけしているものと思う。しかし、「知の世紀」といわれるこれからの時代、大学における優れた教育による真に実力を備えた人材の育成、先端的な研究による創造と発信、それらを基盤とする社会貢献は、日本にとって不可欠の要素であるといつてよい。それ故にこそ、今回の法人化について、吹き荒れる嵐の中で、行政改革としてではなく、大学改革の一環としての制度化を推進してきた次第である。この機を逃さず、すべての大学においてしっかりとその本領を発揮して頂きたい。駒場の先生方には十分その期待にこたえていただけるものと期待している。

そうした中であつて、駒場の特色は全国の大学の中で、唯一教養教育の在り方、総合文化研究の先端を切りひらく存在である、と言う点ではなからうか。それは現代の大学教育においてもつとも欠けてきた、重要なテーマでもある。浅島教養学部長も、駒場の責務を(一)時代をリードできるような教養教育の理念と質を作り上げていくこと、(二)教職員と学生との人間の和と相互の信頼関係にもとづくアカデミック・ヒューマニティの構築にあり、と述べられている(『駒場二〇〇三』)。

駒場での学びを通じ、これからの先行き不透明で不確実な時代、どんな課題に直面しても積極的に取り組むたくましさを持ち、知的にも人格的にも優れた、真に教養あるリーダーとなりうる若者たちを輩出して頂きたい。それが「自立と創造」を理念として、初等中等教育から大学までの教育改革をひきいてきた私の願いである。

さて、そのような大きな課題を抱え、かつ、緊縮財政の外圧もせまる中で、駒場に本来の使命を存分に果たして頂くには、自らの努力とともに、駒場にかかわった多くの先輩たちの物的精神的なバックアップが大事であろう。このことは、これからは大学が狭く閉じた存在ではなく、開かれた透明性のある存在でなくてはならないことも連動している。このたび、法人化を契機に駒場でも友の会を発足させることになり、私も大いに賛同している。そしてできれば、仲間内のノスタルジーを満足させることに力点が置かれがちの同窓会ではなく、駒場の教育・研究・社会貢献が活力のあるものとなるよう支援することに力点をおいたものでありたい。

会員は駒場のリベラル・アーツの精神を愛することで一致して集い、いかに駒場の活動に寄与できるかを常に考え、実行に移す存在でありたいものである。できるだけ多くの知友に声をかけていただき、今変革の時にある駒場を盛り立て、ひいては日本の発展を期す

という、高い志の友の会でありたいものである。

設立総会報告

駒場友の会の設立総会が、二〇〇四年三月二〇日(土)午後二時より、教養学部アドミニストレーション棟三階の学際交流ホールで開催されました。

この総会は、呼びかけ人二〇七名の発起によつて開催されたもので、学部内外から約七〇名の方々が参加されました。

教養学部の兵頭俊夫評議員を仮議長として議事が進行し、設立準備委員会の古田元夫教授から会則の提案があり、満場一致で可決されました。引き続き、本間長世本学名誉教授が会長に選出されました。その後、本間会長の議事進行により、副会長(二名)、理事(二〇名)、監事(二名)が選出され、また今年度の事業計画と予算案が承認されました。

選出された理事と監事は以下の通りです。

会長・本間長世

副会長・嘉治元郎、毛利秀雄

理事・浅島誠、石井紫郎、

大澤吉博、落合卓四郎、小林寛道、
遠山敦子、蓮實重彦、原田義也、
古田元夫、宮川清

監事・瀧田佳子、風間勝昭
(任期は、平成一八年三月三十一日まで)

その後、浅島誠大学院総合文化研究科長・教養学部長と、大学院数理科学研究科の桂利行評議員からお礼の言葉が述べられ、午後二時四五分に閉会しました。

総会の終了後、三階会議室で祝賀会が開催され、遠山敦子文部科学省顧問(元文部科学大臣)、三重野康一高同窓会理事長(当時)、池上久雄東京大学副学長、石井紫郎赤門運動會会長をはじめとする各界の方々より、祝辞を頂戴しました。



本間長世本学名誉教授



遠山敦子文部科学省顧問
(元文部科学大臣)

会員の図書館利用について

駒場図書館・大学院総合文化研究科図書館との話し合いがまとまり、会員は会員証を提示すれば図書館に入り、図書を借りることが出来るようになりました。借り出せるのは書籍が二冊で、期間は二週間です。二週間後に予約が入っていない場合には、貸出期間をさらに二週間延長することもできます。これまでは専攻長や図書委員会の承認が必要でしたが、これからは会員はカウンターで手続きをすれば、すぐに本が借りられるようになります。カウンターにお越しの際は、会員証とご本人であることを確認できるものをご持参ください。



「駒場友の会」会員証 (見本)

友の会ホームページ開設

ホームページが開設され、皆様に駒場の催し物などの情報をお知らせしています。オルガン演奏会や博物館の展示などに足をお運びいただけますようお願いしています。

<http://www.c.u-tokyo.ac.jp/ilovekomaba/>

駒場友の会事務局

左の写真に見られるように、駒場ファカルティハウス二階に事務局ができました。月曜日から金曜日まで、午前十時三十分より午後五時まで開室しています(但し、十二時より十三時までには昼休みのため閉室)。事務室には武田富子さんが勤務しています。一高同



ファカルティハウス二階の事務室内の様子
(この日は一高同窓会の方が多く見られました)

窓会事務室も同じ部屋に引越してきましたので、賑やかな雰囲気になることもあります。お気軽にお立ち寄りください。

駒場友の会現況

三月の設立総会からすでに半年以上が経過していますが、現在の会員数は終身会員二十七名、会員二一九名、会友八名の小計二六四名(十一月八日現在)です。それに団体会員として一高同窓会の方々がいます。今年度の目標は一千名の会員数を達成することです。現在の会員数はまだ目標にはほど遠い数ですが、お知り合いの方にも駒場友の会のことを宣伝していただき、入会のご勧誘をしていただければ幸いです。電話番号が最後に記してありますので、お電話いただければ、すぐに入会申込書をお送りします。また上記ホームページから入会申込書をダウンロードすることもできます。

駒場友の会会報 第一号

平成十六年十一月一日発行

発行人 大澤吉博
駒場友の会事務局

〒一五三―八九〇二 目黒区駒場三一八一―

東京大学駒場ファカルティハウス内

電話 〇三―三四六七―三三三六

メールアドレス

info-tomo@adm.c.u-tokyo.ac.jp